

経験主義的言語論の光と影

— R. タリスの『ソシュールにあらす』によせて —

Positive and Negative Aspects of an Empirical Linguistic Theory — with reference to *Not Saussure* by Raymond Tallis

船 山 良 一

Ryoichi Funayama

はじめに

百花繚乱の観を呈している現代文芸理論のなかでも1960年代に興ったポスト・ソシュール派の理論はその主流を形成し、構造主義あるいはそれを批判的に継承したポスト構造主義として息の長い命脈を保っている。ポスト・ソシュール派の理論は、テキストを完結した自立的体系とみなし、その構造分析を研究の主眼とするものである。すなわち通時的ではない共時的研究に重きを置いている。その理論体系はソシュール言語学に依拠しつつ「意味は記号の差異から生まれるのであり、客観的實在に意味の根源があるのではない；言語は閉じた体系であり、言語外に現実はない」という命題を提唱するがゆえに、強力な反リアリズムの潮流を形成してきた。

R. タリスは『ソシュールにあらす』⁽¹⁾で、このようなポスト・ソシュール派の理論に対し、それはソシュールを誤読することから出発しているがゆえに正当性を持ちえないと痛烈に批判した上で、さらにはソシュール言語論の限界を越えてリアリズム論を積極的に提示するのである。本書『ソシュールにあらす』は、反リアリズムの潮流に抗しリアリズムの復権をはかろうとするタリスの良心的で真摯な意図に貫かれており、高く評価しうるものである。

そのことを十分に確認した上で、残念ながら私は、タリスの理論は黙視できない重大な誤謬をはらんでいることを指摘しないわけにはいかない。

その典型は、ポスト・ソシュール派を「ソシュールにあらす」と批判するタリス自身が、「ソシュールにあらす」であるという皮肉な結果に終わっていることである。本稿はそのことをタリスのポスト構造主義批判に則して検討することにする。なお私もかつて拙稿“After the Play : A study on deconstruction with reference to J. Derrida's theory of écriture”⁽²⁾ および「ディコンストラクションについて」⁽³⁾で、タリスとはほぼ同じテーマを同様な問題意識で扱ったことがあるので適宜それらを参照することにする。

1. 第3章「^{レフアレンス}対象指示性という幻想」を中心に

題名『ソシュールにあらす』が示すように本書の中心テーマの1つは、ポスト・ソシュール派なかでもポスト構造主義の理論がソシュールに対する誤読あるいは無理解から成り立っており、それゆえにポスト・ソシュール派は「ソシュールにあらす」と主張することにある。本稿はしばらく第3章「^{レフアレンス}対象指示性という幻想」を中心にタリスの議論を追うこととする。

ソシュールは、言葉以前にアプリアリに事物や概念があり、言葉はそれに名づけをするという言語命名目録観を否定し、言葉があって初めて概念（意味）が生まれるということ、その言葉の意味は言語の差異の体系に基づくものであることを説いた。ここにソシュール言語学の革命的性格があ

るとタリスは言う。「一般言語学講義」⁽⁴⁾によれば、
The conceptual side of value is made up solely of relations and differences with respect to the other terms of language . . . differences carry signification . . . a segment of language can never in the final analysis be based on anything except its noncoincidence with the rest. *Arbitrary* and *differential* are two correlative qualities. (Course, pp. 117-18) (イタリックは原文；以下本論中のすべての引用文は同じ。)

ポスト・ソシュール派の文芸理論家たちは、このソシュールの説から言語は対象指示性^{レファレンス}をもたないという結論を引き出し、反リアリズムの強力な論陣を張るが、それはソシュール言語学におけるラング（社会的言語構造）とパロール（個人の発話行為）の区別を無視することから成立しているとタリスは言う。なぜならポスト構造主義は言語をすべて差異の体系ととるが、当のソシュールは「所記（シニフィエ）であれ能記（シニフィアン）であれ、別々では純粋に差異的であり消極的であるが、それらの結合は積極的事実である」（「講義」pp. 168-69）と述べているからである。（このタリスの指摘がはらむ難点は今は問わないことにする。）

ポスト・ソシュール派は、このソシュールに対する誤読からさらに以下の命題を立て言語外現実の否定を徹底してゆく。

- (i) 全ての構造的体系は閉じられている。
- (ii) 意味 (meaning) と意味を特定するものは一致する。
- (iii) 意味と対象指示性^{レファレンス}は同じである。

タリスは以上の命題を1つひとつ子細に検討しているが、その要点だけを取り上げる。

- (i) 「全ての構造的体系は閉じられているか」
(pp. 70-9)

言語はそれ自身で完結した自立的体系であるから言語の外の客観的現実を指示することはないとポスト・ソシュール派のT・ホークスは主張する。それにタリスはこう反論する。

例えば脳の構造は、脳を外界から遮断するものではなく、神経反射の様式がその反射をひきおこす外的事物を知覚することを可能とする条件である。それと同様に、言語構造は音声に意味を付与

することによって、発話が言語外現実にかかれたものとなることを保障しているのである、と。これは内科医を本業とする著者らしい言い方であり、具体的事物と経験に即しての叙述は本書の魅力をなしている。

しかしホークスを批判しての次のタリスの結論には小さくはない難点が見い出される。

Behind the idea that language is somehow closed off from reality so that it refers to nothing other than itself is a confusion between structure and event, between the system or institution and its use in discourse. (p. 78)

Moreover, it is language users who put together specific formations of words. Language itself (an abstract construction if ever there was one) is not a language user; it is not an agent; it has neither the capacity nor the need to refer to anything. Hawkes's conclusion that language is sealed off from reality because it is structured is due ultimately to a confusion between the institution, the system, the structure called language, and the use of that system by individual speakers and writers in particular discourses that take place at a particular time. (p. 79)

ここでタリスは、ポスト・ソシュール派の体系をもって外的現実を締め出してしまう論は、構造と出来事、体系と体系を使用しての言説を混同することに起因する、と言う。（この指摘の当否は後に検討する。）次いでタリスはホークスに反論して、「抽象的構造物である言語自体は言語の使用者と同じではない. . . 言語自体には何ものかに言及する能力もなければ必要もない」と述べる。このタリスの見解には黙過しえない点が含まれる。タリスは、ソシュール言語学における対象指示性^{レファレンス}を発話行為（パロール）にのみ認め、言語の社会的体系（ラング）には認めないのである。これはソシュール解釈における重大な誤謬である。なぜならラングに対象指示性を認めないなら、その言語共同体で安定したコミュニケーションと生産と消費を中心とした社会生活が営めなくなるであろうから。タリスの理論では、言語の意味に支配的な

のは発話をとりまくコンテキストとならざるをえない。これは場当たりの無秩序な言語観である。ソシュール言語学がそのようなものであるとは私にはまったく思えないが、管見は本稿第2節および第3節で述べることにする。

(ii) 「意味と意味を特定するものは同一であるか」(pp. 79 - 82)

この反問でタリスは、意味(meaning)ではパロールにおける語のシニフィエ(記号内容)を、「意味を特定するもの」ではソシュール言語学での差別的な価値の体系(ラング)と発話行為(パロール)を規定するコンテキストの両方を指しているのであるが、この項で主としてタリスが取り上げるのは意味と価値(value)の関係である。以下タリスの議論を追う。

ラングとパロール、^{タイプ}型(type)と^{トークン}生起例(token)、制度としての言語と特定の言説、これらを混同した結果、ポスト・ソシュール派は意味と差別的な価値を同一視する誤りを犯している。ロラン・バルトによれば「言語とは分節化の領域であり、意味とはなにかんづく形を切り取ることである。ジャック・デリダはこの論をさらに大胆に進め、「意味は差異を通してのみ得られる。だから意味は差異である」と言い切ってしまう。彼らはこのように意味と差別的な価値を同一視することによって言語の外の客観的現実を否定してゆく。

このような所説に対するタリスの反論の第1は、経験的事実を提起することである。例えばある色名が他のすべての色名と対立していることは、経験によらずとも確かに言える。しかしある色彩がスペクトルの中でどの位置を占めるかは、それを体験するまで分からない。すなわちポスト・ソシュール派がよく自説の論拠にもち出す色名法は、彼らの「差異の理論」を支えるものではなく、かえって客観的・外部的実在を裏づけるものである、とする。タリスの第2の反論は、ソシュール言語学においてシニフィエ(記号内容)とシニフィアン(記号表現)をそれぞれ価値と見、それらはどちらも示差的、関係的で実体のない純粹の形式であると言えるのはラングにおいてのみであり、記号が全体として用いられるパロールではそのことは当てはまらない、と主張することである。

第1の経験的事実にもとづく反論は一定の有効

性をもちえよう。しかし第2の反論には幾つかの弱点が含まれる。ポスト・ソシュール派がラングとパロールを混同しているという本書で繰り返されるタリスの説には、ソシュールに対する誤読が含まれているが、それは後に詳しく分析することにする。ここで問題にしなければならないのは、タリスはポスト・ソシュール派の反リアリズムに反論する余り、ソシュールの重要な命題である「意味は、記号の差異から生まれる」の真意を掴まずにそれを丸ごと否定してしまったことである。私見によれば、ソシュールの命題は少しも言語外現実と言語の対象指示性を否定するものではなく、その命題にこそソシュールの独創的な所見がこめられていると言える。⁽⁵⁾

(iii) 「意味と対象指示性は同じであるか」(pp. 82 - 6)

ポスト・ソシュール派の文芸理論は、^{レファレン}対象指示性は言語内のであり、テキストが語るのは外的世界ではなくテキスト自身についてのみである、としてリアリズムを攻撃する。しかしその見方は、意味と^{レファレン}対象指示性を同一視することから生じる、とタリスは言う。両者を区別することが近代言語学の主要なテーマの一つであるとしてタリスは、周知のフレーゲが提出した「宵の明星」と「明けの明星」の例をあげている。

次いでタリスは^{レファレン}対象指示性についての自説を開陳するが、それは問題含みである。

Ultimately, the transition from the (general) meaning of a referring expression to the particular, unique referent will involve utilising the context of the utterance in which the expression occurs. A significant part of this context will be the deictic or spatio-temporal co-ordinates of the act of utterance. Without the existential situations of speakers and hearers to provide an extralinguistic point of reference, inescapably general meaning could not be used to pin down reference to unique particulars. Without the 'thisness' implicit in the fact that the utterance is originating from a particular body, a particular mouth, and that it is being emitted into a particular shared world whose co-ordinates could be

at least in part specifiable in spatio-temporal terms, reference would remain indeterminate – or, more precisely, would not take place. (pp. 83-4)

タリスは第4章「回復された指示性」でレファレンス論を十全に展開するので、ここでは簡単に押さえておきたい。

(1) 発話行為をとりまくコンテキストが時間的・空間的な指示座標(deictic co-ordinates)として機能し、それなくして一般的な意味と個別的な指示されるものを結ぶ対象指示性は生じないという。具体例をあげれば、発話行為において記号「イヌ」を用いて目の犬を指示するときの記号と犬の関係をタリスは指示性と言っている。これは我々の理解とは根本的に異なるものである。なぜなら、タリスでは指示性と指示されるものとは、パロールという同一次元の同一の発話行為の中での区分にすぎないが、我々は指示性を基本的にはラングに、指示されるものをパロールに認めるからである。例えば、ラングにおける記号「イヌ」は、犬というものの、犬のクラスを指示(レファレンス)するのであり、その語を用いて発話行為で具体的な個々の犬をレファレントとして指示すると考えるのである。(6)

(2) 生身の体と口から発せられ、物理的なコンテキストの中に音として吐き出される発話行為なくして指示性は不確定のままである、という。これが余りに即物的な言語観であることを理解するには、ソシュールが言語記号のシニフィアンを物質的な音声ではなく、心的な聴覚映像と規定したことを想いおこすだけで十分であろう。

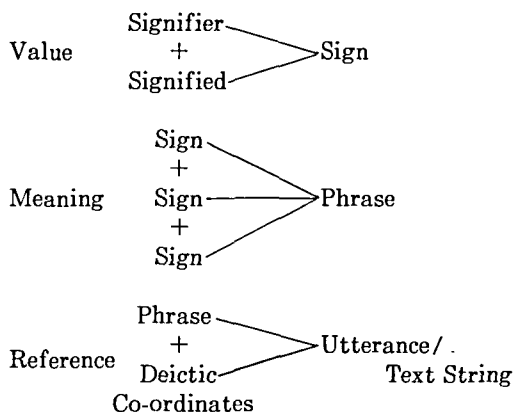
バルトが「意味のあるところに体系がある」という仮説から「指示性のあるところに体系がある」という結論を導くのは妥当ではないとしてタリスは、次のように体系と指示性の関係を把握する。

Where there are values in the Saussurean sense, there must also be system; but reference is not always mediated through value; and, as we have shown, reference cannot be realised solely through the system. *The system* has no referents; reference, if it utilises the system at all (rather than bypassing it by using ostensibly defined

proper names), must also involve the extra-linguistic reality within which the system is operating at the time; the deictic co-ordinates that are implicit in the spatio-temporal context of the utterance. (p. 85)

タリスはレファレンスの決定要因として言語体系(ラング)をすべて否定するのではないが、それよりもむしろ発話行為(パロール)をとりまく時間的・空間的コンテキストに内在する指示座標としての言語外現実を重視するのである。ここにタリスの言語観の特徴がある。

第3章のまとめとして、価値と意味と対象指示性を混同するところにポスト・ソシュール派のリアリズムの理論的基礎があるとタリスは見て、それらの関係を図示しているので掲げておく。



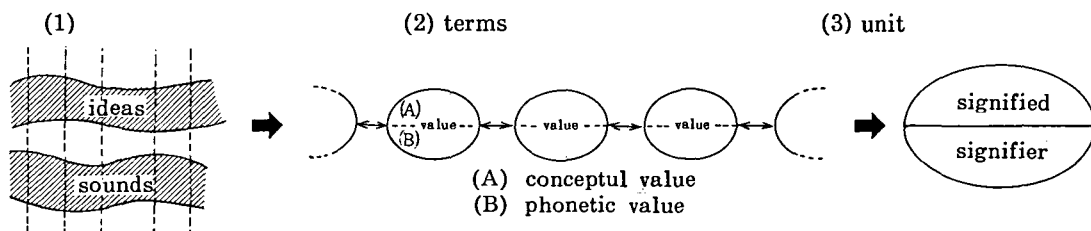
Value ≠ Meaning ≠ Reference (p. 94)

ポスト・ソシュール派に反撃してリアリズムを擁護しようとするタリスの主張には首肯できる点が少なくない。しかし彼の価値と意味と対象指示性の理解の仕方には幾つかの難点がある。その最大の1つは、繰り返しになるが、ラングを差別的な価値の体系とだけ見、意味と指示性を現実の発話行為(パロール)にのみ認めることである。それは個々の現象を通してその背後に潜む普遍的本質と歴史の発展方向を典型として描こうとする真のリアリズムの精神に背馳する皮相なリアリズム観と言わねばならない。なぜタリスがソシュール解釈からそのような奇妙な見地に陥るのかは次節で立ち入って論じることにする。

もう1つの難点は、タリスが価値と意味と指示^{レファレンス}性を単純に区別していることである。ソシュール言語学において価値と意味の関係が錯綜していることはソシュール自身が認め、「価値は概念の角度からみると、うたがいのなく意義の一要素であるが後者は前者に依存しておりながら、どうしてそれと区別がつくかを知ることは、すこぶるむずかしい」(『講義』 p. 160)と述べ、そのために

十分な紙幅を割いてその関係を解説している。(『講義』 pp.160 - 65) タリスにはその辺の事情が殆ど思い至らないらしい。私はかつて拙稿でソシュール言語学における価値と意味(義)の関係を調べ、「記号の差異から意味が生まれる」ということのソシュールの意味を分析したことがあるので、その結論部分のみを再掲しておく。

To sum up these arguments of Saussure's, language is not a nomenclature, a way of naming pre-existing concepts. The value of a term emanates from a system of differences, defined by their opposing relations to the other terms of the system, not by their positive contents. In this regard, we are led to his cardinal view that by dividing the continuums of both sounds and concepts, language "sets up an arbitrary relation between signifiers of its own choosing on the one hand, and signifieds of its own choosing on the other." Let me illustrate Saussure's conceptions of language.



The value of a term is completely negative in an opposing system (2). And yet the sign which is only a result of the negative relations of terms, removed from negativity, becomes positive by its own attribute (3). Saussure writes :

But the statement that everything in language is negative is true only if the signified and the signifier are considered separately; when we consider the sign in its totality, we have something that is positive in its own class. . . Although both the signified and the signifier are purely differential and negative when considered separately, their combination is a positive fact.

Both the signified and the signifier are purely differential and negative when considered separately. Nevertheless, once they are combined, a positive unit is realized. That is why a unit is again treated as a "concrete entity," a "reality" or an "identity."⁽⁷⁾

拙稿の要点を繰り返せば、価値は記号の差異(対立)の体系で決まる辞項の大きさ^{ターム}と位置であり、意味(義)はその価値体系の中から生まれてくる単位のシニフィエ(概念)部分である。共時的にみればもともとと同じ記号単位を、体系の中でみれば価値であり、体系から切り離して自立的にみれば意義となる。ここに両者の区別と同一がある。しかし通時(発生論)的にみれば、価値体系は無

定形の観念の切り取りから生まれるものであるゆえに、意義は客観的現実への指示性^{レファレンス}をもつのである。ソシュール言語学はこのような文脈で「意味は差異から生まれる」と規定しているのであるから、意味が差異に還元されることも、対象指示性が否定され言語外現実が理論的には消えてしまうこともない、と私は考える。⁽⁸⁾

2. タリスのポスト構造主義批判の方法

ソシュールは言語記号を一葉の紙片の表裏にたとえ、シニフィアン（記号表現）とシニフィエ（記号内容）は分離不可能と説いた。しかるに、デリダ、バルト、ラカン等に代表されるポスト構造主義の理論家たちは、「言語記号は本質的にシニフィアンの連鎖であるから言語外の実在に到達しえない」と主張する。現代文学の主流をなすポスト・モダンが、このようにソシュール言語学を反ソシュールの的に解釈することから成立しているところにその特色があるとタリスは見る。対象指示性を否定する言語論に根拠を置く文芸理論が、リアリズム文学に攻撃の矛先を向ける。かくして文芸作品は、歴史的社会的存在である作家が彼が生きた現実世界を描いたものではなく、記号とりわけシニフィアンの自由な戯れの場となり、作品世界は欺瞞にみちた幻想(an illusionary fraud)となる。(p.89) この反リアリズム論の代表的な例は、デリダのデイクンストラクション（脱構築）理論である。タリスは書いている。

Derrida develops Peirce's observation that one sign leads to another. If a sign makes sense, then it will signify another sign which will, in turn, signify another sign and so *ad infinitum*. The chain of signs never comes to an end. This implies, Derrida says, that the chain of *signifiers* never comes to an end; more specifically, that the signifiers never reach the plane of the signified. Discourses, texts, utterances, are strands of an 'endless chain of signifiers'. (p. 213)

タリスがなすポスト構造主義の「記号の戯れ」や「シニフィアンの連鎖」論に対する反論の要点は、(1)ソシュール言語学を誤読シラングとパロールを混同している；(2)ソシュールがなした言語記号と自然記号の区別を無視しそれらを同一視している、として経験が確証する客観的実在を提示することである。(1)からタリスの論を見てゆこう。

デリダは、意味はすべて記号の差異の体系から生まれるのだから、客観的実在に意味の根源があるわけではないと言う。確かに、言語には実体のない差異しかないソシュールは述べている。し

かしそれは、シニフィエとシニフィアンが^{ネガティブ}いまだ結合されずにそれぞれのレベルで他と消極的に規定しあうラングという抽象的な言語体系系^{ポジティブ}のみ当てはまるのであって、記号が全体として積極的となって出現する現実の発話行為（パロール）には妥当しない。「言語学講義」第4章4節「全体としてみた記号」はこう述べている。（本書の核心に係わる箇所ゆえにタリスが用いる英訳とあわせて邦訳ものをせる。）

but the statement that everything in language is negative is true only if the signified and the signifier are considered separately; when we consider the sign in its totality, we have something that is positive in its own class. . . . Although both the signified and the signifier are purely differential and negative when considered separately, their combination is a positive fact: it is even the sole type of facts that language has, for maintaining the parallelism between the two classes of differences is the distinctive function of the linguistic institution. (*Course*, pp. 120 - 1)

しかしながら言語ではなにもかも消極的だというのは、所記と能記とをべつべつに取ったときのみいいうことであって、記号をぜんたいとして考察するやいなや、その秩序のうちに、ある積極的なものが見えてくる。言語体系は、音の一連の差異が観念の一連の差異と結合したものである；しかしある数の聴覚記号と、思想のかたまりに同数の分断を施したものを照らし合わずときは、価値体系がうみだされる；各記号の内部において、音的要素と心的要素とのあいだに実効のある連結をつけるものは、この体系である。所記であれ能記であれ、べつべつでは純粹に差異的であり消極的であるが、それらの結合は積極的事実である；この種の事実こそ言語がふくむ唯一のものである、なぜなら言語制度の特性は、まさにこれら二つの秩序の差異のあいだに平行を保つことなのであるから。（『講義』pp. 168 - 69）

タリスは『講義』のこの箇所を次のように解釈する。

Although the *institution* of language consists of 'classes of differences', actual speech is composed of signs which are not merely differential but also positive. In speech we deploy not signifiers or signifieds

in isolation but signs in which they are fused. Differences are used to establish positive, present meaning. Which is precisely what we might have thought all along. A particular speech act is not all a matter of difference (or form); it is also a matter of presence (or content). *The sign in use* is not purely differential, non-substantial.

These points are missed or confused by Derrida. In his essay 'Differance', he writes,

As the condition for signification, this principle of difference affects the *whole sign*, that is, both the signified and the signifying aspects. (p. 212)

言語制度（ラング）はシニフィエとシニフィアンの2つの差異のクラスから成り立っているが、現実の発話行為（パロール）で用いられる記号はシニフィエとシニフィアンが結合した積極的な内容を持ち、それゆえに客観的世界を指示する意味をもつ、とタリスは解説する。差異的で形式のみのラングと実体的で内容をもつパロールというソシュール言語学に基本的な区別を無視し、言語（ラングーシュ）をすべて消極的で示差的とソシュールを誤読したところにポスト・ソシュール派の誤りの主要部分がある、という。本書全体はタリスのこの「発見」を軸に構成されているといっても過言ではない。それゆえに題名が（ポスト・モダン）は『ソシュールにあらざる』なのである。

〈批判的検討〉タリスは「ソシュールにあらざる」ポスト構造主義の理論家は、ソシュール言語学におけるラングとパロールを混同することから、価値と意味と対象指示性を同一視するに至り、それを基礎に「記号の戯れ」や「痕跡」論を構築している。そこでは意味は、客観世界に根源をもちえなくなり決定不能性に陥る。かくして作品世界は現実世界とは無縁の「欺瞞にみちた幻想」になる、という。タリスのこの批判の論拠は『一般言語学講義』第4章4節にあることが分かった。そこから言語が純粋に差異的で消極的であると言えるのは、シニフィエとシニフィアンの2つのクラスが別々に存在するラングにおいてのみであり、両者が結合した記号全体は「積極的事実」であるからパロールに属すると受け取られた。しかしこ

れはソシュールに対する明白な誤読と私は判断する。ところがこの誤読を基に本書の全体が構成されている以上、立ち入って検討する必要がある。タリスがこのような解釈に陥った理由は2つ考えられる。

(1)「積極的事実」(a positive fact)の用語上の解釈から現実の発話行為と受け取ったため。

ソシュールの用語法で「事実」(fact)を単純に現実の事柄と取ることにはできない。「講義」には「言語的事実」や「文法的事実」の用語が散見されるが、それらは私が読む限りいずれもラング(体系としての言語)に関して用いられている。1例をあげよう。言語(ラング)の生成に関する記述と取れる「講義」第4章1節で「言語的事実によって結ばれた二つの領域は、ただ茫漠・無定形であるのみならず、なにがしかの聴覚的切符をあてがう選択は、まったくの恣意的である」(p. 159, 傍点は筆者)と書いている。これはラングにおける記号の恣意性について説明したものである。ソシュールにおける「事実」は、物理的ではないが物理的に顕現することを可能とする潜在態、すなわち心的言語的現実態というほどの意味である。

「積極的」に関して言えば、記号単位が純粋な差異の関係性の中に埋没するのではなく、他との対立関係の中で他とは違う独自の性質を持ち、それ自身として分明なものとして現れている、という意味である。ゆえに「積極的」は「実体的」(substantial)と同義であり、それは物理的に実存するという意味での実質的ではないが、そのことを可能とする潜在態、すなわち言語実現の心的な可能態である。それで私は“a positive fact”を別稿において“a positive unit”と言い換えておいた。⁽⁹⁾それは「講義」第3章で論究されている「同一性」、「実在」、「具体的実在体」と結局は同じものであり、それぞれ視点を変えて捉え直されているのである。それらはいずれも、現実存在するものではないが、さりとて抽象的なものではなく、パロールでの資料的実現を通して顕在化する可能態と規定されている。(pp 151 - 56)

(2)タリスが消極的な価値をラングの次元に、積極的な意味をすべてパロールの次元に置いているため。

このことを検討するにはタリスのラングとパロ

ールについての理解の仕方を見てもおく必要がある。タリスはチョムスキーの「ひとは文法構造を潜在的能力としてもつ」というシンタックス中心論を批判してこう言う。

Grammatical rules cannot be specified without explicit or implicit reference to meaning. The 'system' such as it is cannot even begin to be described without reference to its particular operations on specific occasions in the real world. It is my knowledge of extra-linguistic reality, rather than of the internal rules of grammar, that enables me to recognise that 'Golf plays John' is ill-formed.

... meaning cannot be entirely controlled from within by syntax and that a context-based intuition of the speaker's intentions is necessary not only to determine the meaning but also the grammatical structure of what has been said. There is no syntax without semantics: without interpretation, without meaning, structure cannot be seen.

And the same observations apply to structuralist linguistics as a whole. It is ultimately on the basis of referential meaning that the oppositions that make up the field of a particular term are perceived. *The structure cannot be seen, the contrasts cannot be observed, without the referents of the elements being known, without interpretation.* The structuralist principle that 'where there is meaning there is also structure' could just as well be inverted: there is no structure without meaning. (pp.72-3)

要約すれば、構造主義は「意味のあるところに構造がある」、すなわち「意味は差別的な構造から生まれその中のみある」と言う。それに対してタリスは、発話者がコンテキストの中で客観的事物を経験してえる直感や知識なくして意味は決定できない、ゆえに「意味なくして構造はない」と主張する。また、言語構造(ラング)は、指示対象に係る意味によらずして知覚されることはない。この点でチョムスキーが言うシンタックスのみが言葉の意味を保障するというのは言語の実相に反する。タリスにとって「意味は言語体系とコンテ

クストの相互作用から生まれる」(p. 76)のである。この命題の真意は、差別的な価値体系から純粹に形式のみであるタイプ(型)の供給を受け、パロール次元での具体的コンテキストの中で、発話者が事物の経験にもとづく知識でもってタイプ(形式)に内容を盛りトークン(生起例)とする、換言すれば、タイプをトークンとして例現化するところに意味が生まれる、ということである。

ポストソシュール派がラングとパロール、タイプとトークンを混同していると批判するのが本書で繰り返されるテーマの1つであるので、タリスの見解がよく窺える例をあげておく。

... his argument seems to depend on a confusion between the system, to which verbal types could be plausibly said to belong, and the use of the system on a particular occasion, when types are instantiated as tokens, which is not itself part of the system. If he hadn't confused the type and the token, the system and its use on particular occasions, it is unlikely that he would wish us to believe that words 'function within the *structure* [my emphasis] of the English language'. (pp. 70 - 1)

<タリスの問題点>

個々の発話行為を通して体系が把握されるとタリスが言うのは、ソシュールとほぼ同じであろう。しかしそのことからタリスは、ラングは純粹に差別的な形式であり、積極的な実体はコンテキストにおける発話者の経験をまっけて初めて得られるのであり、そこに意味が生まれる、と考える。さらには、経験に基づく知識なくして体系(ラング)が知覚されないばかりでなく、文法構造も決定されないという思いきった言い方をする。これは実在的なコンテキストにおける発話行為なくしては何も決まらないとするパロール主義とも呼べる経験主義である。私見の限り、それはソシュール言語学とは根本的に相違する。

ソシュールは、「副次的で言語活動の個人的な部分」であるパロールを対象とする言語学と「本質において社会的で個人とは独立」のラングを対象とする言語学を区別し、言語学本来のあり方は後者にこそあると宣言している。(「講義」p. 34) 体系

としての言語（ラング）は次のように要約される。

1. . . .それは聴覚映像が概念と連合する場所である。それは言語活動の社会的部分であり、個人の外にある部分である；個人は独力ではこれを作り出すことも変更することもできない；それは共同社会の成員のあいだに取りかわされた一種の契約の力によってはじめて存在する。他面、その営みを知るには、個人は学習を必要とする；子供は除々にしかこれをものにしない. . . .

2. 言語は、言とはことなり、切りはなして研究しうる対象である. . . .

3. 言語活動は異質的であるが、上のように限定された言語は、等質的性質のものである；それは記号体系であり、そこでは意味と聴覚映像との合一において他に本質的なものはなく、また記号の二部分はひとしく心的である。

4. 言語が具体的性質の対象であることは、言におとらない；これは研究上おおきな利点である。言語記号は、本質的に心的でありながら、さればとて抽象的ではない；集団的同意によって批准され、その総体が言語を組みたてる連合は、その座を脳のなかにか有する実在である。なおまた、言語の記号はいわば手を触れることができる；書はそれらを制約的な映像に定着することができるのに対し、言の行為にいたっては、その詳細をのこらず撮影することは不可能であろう. . . .このように言語にかんする事物を定着することができればこそ、辞書と文法とはその忠実な代表でありうるのである。（『講義』pp. 27 - 8）

ソシュールによれば、記号体系のラングは、決して抽象的なものではなく、共同社会の集団的合意によってその構成員各人の脳の中に位置する心的実在である。それは書き留めて手で触れることのできるものであり、その代表が辞書や文法である。それに対し、個的行為のパロールは千差万別で異質的であり捉えどころがないという。これはあえて呼べば、ラング中心主義とも言えるものであり、タリスとは正反対である。タリスのソシュールとの相違（ソシュールにあらず）がもたらす帰結は何であろうか。その中心は、ラングを価値（差異）とのみ見ることにより、意味とそれを通して実現される対象指示性^{レフアレンス}をラングには否定してしまうことである。

「価値」の理解の仕方もタリスにおいては、ソシュール本来の定義を離れて一面的である。『講

義』によれば、価値には①シニフィエとシニフィアンを別々に見た場合の概念的価値と音声的価値、②シニフィエとシニフィアンが結合して捉えられた積極的辞項^{ポジティブ}（体系の中での単位）の価値がある。①の価値間の関係を「差異」、②のそれを「対立」とソシュールは定義している。（p. 169）辞項は積極的ゆえに「同一性の概念と価値のそれとは、たがいに混同する」、「価値の概念が単位、具体的実在体および実在のそれと符号する」（p. 155）とされている。それゆえに第4章2節「概念の角度からみた言語価値」では「語の価値という、人は一般にそしてとりわけ、それが観念を表出する特性のことを考える；事実それもまた言語価値の一面ではある」（p. 160）として、語の価値と語の意義は同じという側面をもつことをソシュールは記述している。まとめれば、体系の中でみた辞項は価値であるが、体系から切り離してそれを単位（語）としてみれば意義を有する、ということである。どちらもラングに属することはもちろんである。¹⁰この点についての無理解、すなわち価値を差異的、消極的^{ネガティブ}とのみ捉え、それがラングの特性とする先入見が本書の全編を被っている。

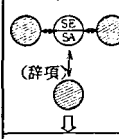
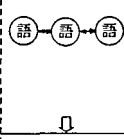
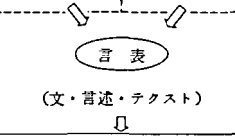
それでは我々はこの問題、ラングとパロール、価値と意味の関係をどう理解すれば良いのであろうか。それには、『ソシュールの思想』の著者、丸山圭三郎氏の所説が有効である。丸山氏は、価値をラングの次元に、意味をすべてパロールの次元に置く、タリスの説と全く同様の見解をもつに至ったA. ビュルジェにこう切り返す。

ビュルジェは、ラング自体がもつ潜在性と顕在性、抽象性と具体性という二重の性格を見落している。潜在的なものはすべてラングに、それが現前され実行されたものはすべてパロールに属せしめることは、一見明快な区別であり、ソシュールの根柢的区別である形相と実質に対応しているかのごとく思われぬこともない。潜在的実体である《価値》をラングに、それが条件となり源となって現前する《意義群》をパロールに属せしめた. . . .ところが、事実はそのほど単純ではないのである。¹¹

丸山氏はいくつかの事例を検討した上で、ラングには①形相としてのラングと②規範としてのラングがあると言う。

以上から判明することは、ソシュールのラングには、①《形相》としてのラングと、②社会的に実現された《規範》としてのラングがあるという事実である。後者の具体性は、もちろんパロールの「実質」とは異質のものであるが、純粋な関係の網である形相が社会的に実現された結果、一つには音的性格を持ち（原理的には、視覚・嗅覚・味覚・触覚といふいかなる実現形式をとることも可能である）、二つにはその社会習慣が許容する変異体のみが強いられる（原理的には、いかなる差異でも対立化されさえすればよい）という意味で、一種の有形性を具えているラングなのだ。¹²

このラングの2つのレベルに「実質としてのパロール」のレベルを加えた丸山氏の次の図は有益である。

ラング		パロール	
形相 (実現可能なもの)	規範 (第一次実現)	生産活動 (第二次実現)	実質
◇価値体系 ◇記号学的関係 潜在 { 連辞関係 連合関係	◇社会制度 ◇言語現実 頭在一連辞 (文脈)	◇個人的実践 ◇言語活動 言表行為 (選択と結合)	◇材質 ◇物理的現実 音声化 (状況)
			
価値	意義	意味	

我々は丸山氏の説に従って、ラングに二重のレベルを認めなければならないと思う。ラングにおける語の意義(signification)とパロールにおける言葉の意味(sense)は区別されるものである。前者は「辞書に見出される語の定義であり、その言語社会によって許容され沈澱している最大公約数的な意義群、すなわち外示」である。後者は「一方ではパロール的状况に依存し、他方ではラングの〈意義〉に依存している、...いかに語の選択と結合が個人の自由にまかされているとは言え、人はその言語の文法性からのがれることも、既成の意味体系をはみ出すこともできない」のである。¹³ 発話では行為者の自由な創造性が発揮されるとしても、それはその言語(ラング)に規範的な法則に従ってなされるのである。そうでなければ共同社会そのものの維持、発展がありえなくなるであろう。

これまでをふり返って、いま一度問題の箇所

(『講義』pp. 168 - 69)に戻ると、「所記であれ能記であれ、べつべつでは純粋に差異的で消極的であるが、それらの結合は積極的事実である」ということは、価値体系である形相としてのラングでシニフィエとシニフィアンを別々に見ると消極的であるが、両者を結合して全体として見た記号(辞項)は積極的な内容(意義)をもち、規範としてのラングで実現される、ということである。その理由を説明する次の「なぜなら言語制度の特性は、まさにこれら二つの秩序の差異のあいだに平行を保つことなのである」は、この前で言われている「ある数の聴覚記号と思想のかたまりに同数の分断を施したものとを照らし合わせるときは、価値体系がうみだされる」と同義である。すなわち、シニフィエとシニフィアンの結合により積極的な辞項による対立的な価値体系を生み出すことが言語制度(ラング)の特性と規定しているのである。

そもそもこの節の見出し「全体としてみた記号」(The Sign Considered in its Totality)が示すように、同一次元にある1つのもの(記号単位)を角度を変えて見たということである。つまり、シニフィエとシニフィアンをそれぞれに見ると消極的であるが、記号を全体として見ると積極的である、と述べている。ソシュールは、シニフィエとシニフィアンは一葉の紙片の表裏のごとくで、両者を分断することは抽象的、観念的にしかできない、と言う。それゆえ、この箇所からタリスのように、ラングとパロールという2つの異なる次元を読み取ることは土台無理である。

以上によりタリスの誤読は解明できたと思う。タリスはこのソシュール解釈を軸に本書の全体を構成し、ポスト・ソシュール派を批判しているのであるが、その論拠は今や崩れたと言わねばならない。ラングはすべて差異的で消極的としてしまったタリスの誤読が帰結するところは重大である。

Yes, difference does affect both aspects of the sign; but *not* the sign as a whole. (p. 212)

It is of course obvious that *the system* should be purely negative and differential although the signs *in use* are positive. (p. 213)

タリスの論に従えば、言語体系(ラング)の次

元では、積極的な記号単位が生まれ、その概念的
内容として意味（義）をもつことは一切ありえず、
したがって意味を通して実現される対象指示性が
えられなくなる。このことは、とりわけ「指示的
リアリズム」を提唱するタリスにとって致命的と
はならないか。

堀尾輝久氏は『教育入門』の中で「文化の伝達
と社会の持続」に関して書いている。

こうして子どもたち（若い世代）を社会の成員と
して迎え入れるということは、親たち（古い世代）
がその子らに、身体的健康に配慮しながら言語を教
え、習慣を身につけさせ、共通の価値観や価値感情
を育て、集団の規律に従うことを学ばせることを通
して行われましたが、さらにそれに加えて、労働技
術やそれにかかわる知識を伝達することも不可欠な
ことでした。

人類は長い進化の歴史のなかで、労働によって自
然に働きかけ、自然を変え、このことを通して人間
自身の能力を豊かにし、それを次代に伝えながら人
間の歴史を築いてきたのですが、この過程はまた、
人間の技術の発展の歴史でもありました。

古い世代から新しい世代へ文化と生産技術を伝え、
共同社会を維持し発展させることは、人類におい
ては何よりも社会的規範としての言語（ラング）
を用いたコミュニケーションによって可能となる。
ラングに共通の意味を認めなければ、このような
社会観、歴史観が閉ざされてしまうことになる。
ここにタリス説の容認しえない点がある。

〈事物や経験の場合〉

タリスのポスト構造主義の「シニフィアンの連鎖」
論に対する批判の第2の方法は、客観的実在
である物と経験的事実を反証に提起することであ
る。物の場合からみてゆこう。

タリスにとって物はすべて自然記号でもある。

Even natural signs do not produce a total
closure of meaning: when grey clouds sign-
ify rain, this is not the end of the matter.
The sense of the world is not rounded off.
No sign is an island, able to solve the world
one and for all. (p. 213)

暗雲が自然記号として雨を意味する場合のよう
に、物はそれ自体で客観的実在であり、シニフィ

アンという抽象的存在とは異なる。かつ、物は
個々別々に存在するのではなく互いに自然記号と
して意味の連鎖をもち客観的世界に向って開かれ
ている。ソシュールは閉じられた体系をなす言語
（ラング）と無限の意味の連鎖をもちながら外界
に開かれている自然記号を截然と区別したが、ポ
スト構造主義はそれらを混同し、①客観的世界（自
然記号の連鎖）も言語記号の体系もすべて閉じら
れた構造として、外的現実を否定する。②「シニ
フィアンの連鎖」論は、シニフィアンの抽象性、
観念性を客観的事物にまで押し広げ、シニフィ
アンがもつ消極性と差異性で現実世界をも包みこむ。

以上がタリスが批判するポスト構造主義のソシ
ュールに対するもう1つの誤読である。記号体系
をもってすべてを観念化、抽象化してしまうポ
スト・ソシュール派に対して、常に客観的現実を提
起するタリスの方法には評価しうる点も多い、が
そこには黙視できない欠陥も含まれている。ここ
でのタリスは、物そのものに意味があるという先
見に立って、客観的世界の全面的連鎖というリア
リズムの命題を、自然記号の意味連鎖と捉えてい
るのである。これは意味（概念）は言葉の中にあ
るとしたソシュール以後の近代言語学に反する珍
説であるが、詳しくは次節で検討する。

次にタリスが経験的事実を挙げてポスト・モダ
ンに反論する場合を見る。『講義』第4章1節は
有名であるが広く誤解されてきたとタリスは言う。

Psychologically our thought – apart from its
expression in words – is only a shapeless and
indistinct mass . . . without the help of
signs we would be unable to make a clear-
cut, consistent distinction between two ideas.
Without language, thought is a vague, un-
charted nebula. There are no pre-existing
ideas before the appearance of language.
(Course, pp. 111 - 12)

タリスの説明によると、この箇所の真意は、思
考が未分明な状態にあるのは、いまだひとの頭
の中だけで考えられているうちである。それが言葉
として表現され他人に伝達されたとき、思考は明
瞭な輪郭をもつということである。タリスはこう
書いている。

... ideas, perhaps, have distinct boundaries only when they are expressed in distinct sentences; they do not come with their own edges. Moreover, their 'distinctness', like vagueness, can be assessed only when they are made public; that is to say communicated; that is to say uttered or written.

(p. 56)

要するに、言葉に出して初めてひとの思考と意識は明瞭になり、それ以前は曖昧であるという経験則に照らしてタリスはソシュールを解釈している。ここにもラングはすべて消極的で、パロールが積極的というタリスの単純なソシュール読解が影を落としている。しかし「講義」第4章1節全体が言語（ラング）の成立についてのソシュールの仮説であるから、タリスの解釈は的はずれである。もっとも系統発生（社会的なラングの成立過程）を個体発生（個人のランゲージュの生成過程）が繰り返すと取れば一応の意味はなすかもしれないが、タリスにその自覚はなく、系統発生と個体発生を混同している。

ポスト・モダンに反論するのにタリスは常に現実の発話行為（パロール）に依拠する。しかしソシュールは、パロールの意義を認めつつも言語学本来の研究はラングを対象とすべきことを強調したのではなかったか。ソシュールが力説したラングという言語の抽象的な次元では、タリスはポスト・モダンに対して一切の反論ができない。すでにみたように、ポスト・モダンがソシュール言語学のラングとパロールの混同からではなく、ラングそのものについての理論から特異な理論体系を構築し、それによって現実世界さえも抽象化、観念化しているのであるから、タリスの説は彼らに対して外在的ではあれ内在的批判とはなりえない。その原因は、タリスがラングをすべて差異的で消極的とみていることにある。そのためにラングという抽象的次元で言語と客観的現実との関係を積極的に提示することができなくなる。

かってT. イーグルトンは、R. ウィリアムズを指して「社会についての概念の有効性は、ひとえに具体的経験、感覚で捉えられた生活に直接妥当するかどうかにかかって行く。理論が理論とし

て機能せず、生きた経験から有機的に湧き出たものでない限り相手にされないきらいがある」と評したことがある。このことはまさにタリスに当てはまる。理論という抽象的な営みが深化されることなく常に経験と物に引き戻される。ここに、眼に見えるもの、耳にふれるもの、手で触られるもの以外は信じられないタリスの経験主義的言語論の光と影がある。すなわち、その限りにおいて認められる現実と、その限りにおいてしか認められない現実として。

〈ポスト・モダン批判のあり方〉

私はかつてポスト構造主義の代表的思想家ジャック・デリダのディコンストラクション（脱構築）理論を分析し、「エクリチュール」、「差延作用」、「痕跡」という概念で提出されるデリダの理論的戦略の眼目は、シーニュ（記号）のシニフィエ（記号内容）を抹消することにあるとして、こう書いたことがある。

ソシュールは個々の言語記号には音声である記号表現としての「意味するもの」（能記）とそれによって概念化される記号内容としての「意味されるもの」（所記）の2側面があり、両者の関係は本来恣意的であるが、自然言語（母語）においては慣習によって制約されているとみた。ソシュール言語学を脱構築せんとしてデリダが狙いを定めるのは記号の2側面のうちの所記である。なぜなら記号の意味的側面である所記こそが現実対象と人間意識の結節点だからである。⁽¹⁹⁾

ロゴス中心主義を批判するデリダが、執拗にシーニュのシニフィエを攻撃対象とするのは、意味的機能をつかさどるシニフィエこそ、主観の客観に対する認識作用に係るからであり、シニフィエを抹消することは理論的には、主体と客体の両方を同時に抹消し、世界のすべてを「記号の戯れ」、「シニフィアの連鎖」に巻き込むことになるからである。これが、作者の死、相互テクスト性、読みの理論というポスト構造主義に特有な見方の理論的基礎となることは容易である。その理論構築の方法は、私もタリスと同様に、ポスト・ソシュール派がソシュール言語学のいくつかの重要な命題を曲解することにあると指摘した。デリダのなすソシュール誤読あるいは恣意的ねじまげの中心

部分について拙稿から再掲しておく。

ソシュールの言語論によれば、記号の差異の体系をなす言語は能記のレベルばかりでなく所記のレベルでも対立し相互に限定しあう。ある語の意義は他の語によって定義づけられながら、またある語の意義を定義づける。デリダはこの記号の相互関係を「意味されるもの」は同時に他の語を「意味するもの」であると読み替える。しかしソシュールがいう「意味するもの」と「意味されるもの」とは、記号表現である能記と記号内容である所記という1つの記号内の2要素であり、それらを相互関係性にある語と語に読み替えることがはたして言語学的に許されるものか甚だ疑わしい。つまりデリダはソシュールの記号は能記と所記の2要素の統一であるという理論と言語は記号の差異の体系であるという理論を意図的にか混ぜ合わせているのである。だがそれは概念「犬」が同時に「ネコ」の記号表現（音声）であるなどということではできないから、全くの詭弁でしかない。だがその結果、デリダは意味を消すことによって現実という重い足かせから解放されて「戯れ」の世界に飛び立ちえたのである。¹⁹

タリスも私と同様に、デリダは記号間の関係と1つの記号内のシニフィアンとシニフィエの関係を混同していると指摘している箇所がある。しかしタリスが言わんとすることは、管見とはかなりの懸隔がある。

Derrida misreads [Peirce] as referring to the relationship between signifier and signified. The endlessness of the chain of signs is read as 'the absence of the transcendental signified' and consequently 'the destruction of ontotheology and the metaphysics of presence'. He confuses, in other words, the relationship between whole signs with the relationship between the signifier and the signified of an individual sign. 'One sign leads to another' becomes 'one sign refers to another' becomes 'one signifier refers to another' or 'the (exclusive) referent of a signifier is another signifier'. (pp. 213 - 14)

「切り取り」の概念を媒介にして成立するソシュールの恣意性と差異の理論の相互関係の本質的な意味を理解できないタリスは²⁰、問題の核心に迫

りながら逃がしてしまふ。そのことは引用文を前後の文脈に戻してみるとわかる。

引用文の前でタリスは、ピアスの理論をデリダが曲解することから「差延作用」論が生まれるとしてこう言う。ピアスが言語記号に限らず自然記号をも含めて記号一般としての記号間の関係を述べているのに対して、デリダはそれを言語記号の関係と捉える。そこから自然記号間の関係では体系は本来外界に対して閉じられていないのに、デリダでは記号体系（ラング）が外的現実を締め出してしまふことになるという。しかしこの叙述では、なぜ「際限のない記号の連鎖が超越的シニフィエの不在として読まれる」ことになるのかについては、十分な説得力をもたない。シニフィエがシニフィアン化されることのプロセスとその結果の重要性が、タリスにはよく捉えられてはいない。(p. 213)

引用文の後に続く所も、タリスの独得な見方を露呈している。

As we noted in Chapter 3, Section 3, no sign is ever purely or exclusively a sign. Objects and events *are* (in themselves) as well as having significance. The fact that the chain of signs never comes to an end does not mean that there is only an interminable trail of traces and that presence is never reached. For presence does not lie at the *end* of the trail of signs; rather, it is there from the beginning; the sign is present as well as signifying. For it can signify only if it is present – present to me for whom it is significant. A sign may signify an absence; but only in virtue of being itself present. (p. 214)

記号の連鎖によって現前化 (presence) が得られないとするデリダの「痕跡」理論は、言語記号で考えるからそうなのであって、記号一般に通用するものではない。なぜなら物や事はそれ自体で意味作用をもち、それゆえそれらは自然記号として意味連鎖をなすが、自然記号は存在することが意味することであるから、現前化は初めから保障されているのである、という。タリスはポスト構造主義に反論するのにきまって現実の物理的存在で

ある事物を提起する。そのことには一定の意義が認められるが、内含される問題点も多いので、繰り返しを恐れずに、以下に指摘する。

①「物や事がそれ自体で、意味作用をもつ」という見方は、意味はあくまで記号が含み込むという近代言語学の命題に反する。それは主観と客観を混同し、客観を主観化することになりリアリズムの精神に合致しない。この点でタリスは「ソシュールにあらず」、まともな言語論にあらずである。

②上のタリスの定義から導かれる「物は自然記号として意味の連鎖をなす」という見解は、「客観的世界の全面的連関」というリアリズムの命題を、自然記号の連鎖と誤解するものである。

このように誤解と偏見にみちたタリスの議論は本人の真面目で良心的な意図にもかかわらず、真のリアリズムを復権することにはならない。それはあえて呼ぶなら俗流リアリズム論である。なにかんづく、タリスがはまった最大の陥穽は、デリダの「痕跡」論を批判するのに、経験的事実や客観的事物を反証に提出するが、そのとき記号体系としての言語（ラング）の次元ではデリダの差異化理論を是認してしまうことである。これではポスト構造主義に対して有効な内在的批判にならないばかりでなく、結局はデリダと同様な誤りをおかすことになる。ポスト構造主義批判を遂行するには、パロール次元での経験的事実を提起するのみならず、なによりも言語体系（ラング）のもつポジティブな側面を積極的に提起する必要がある、と私は考える。⁽²¹⁾

3. タリスの「^{レファレンシャル}対象指示的リアリズム」論；第4章を中心に。

はじめにタリスの基本的立場をみておく。リアリズムと言えば、「言葉は事物の代理」であり「テキストの文章構造は、事物の構造を反映する」すなわち「言語と現実是一对一に照応する」という俗説がある。これを同型主義^{アイソモルフィズム}という。他方、これまでみてきたポスト・ソシュール派の言語外現実を否定する反リアリズムの強力な潮流がある。これら2つの誤った傾向を避けてタリスが切り開こうとするのは、それらの中間的立場である。この点で、『政治的無意識』の著者、F. ジェイムソンのパースペクティブ⁽²²⁾に相似している。タリスが

追究するのは、既存の事物や観念に言葉を貼りつける名称目録観でもなければ、言語活動に課せられる外的制限を無視するものでもない。「言語はそれ自身で意味を生み出すことはないとしても、言語は我々をとりまく世界をそれが了解可能な限り、安定化し、またある程度組織化する」(p.102)のである。

タリスはこのように自らの基本的立場を設定したあと、具体的に理論展開をはかる。

The most obvious is that, in so far as a token has a meaning, that meaning is general; material objects, on the other hand, are particulars occupying specific regions of space time. The meaning of a word cannot be a particular object. So the relation between word and object when the word is used to signify a particular object cannot be a direct correlation. The relation between word and object must be mediated. (p. 107)

^{パロール}発話行為における^{トークン}生起例の^{ミーン}意味は一般的であるのに対し、時間と空間の中に特定の位置を占める物質的存在は個別的存在である。それゆえに、言葉の意味と物の関係は直接的ではありえず、媒介されたものと言わなければならない。同型主義の誤謬は、一般的な意味と個別的な物という異質な2つを直接に結んだことにある、とタリスは言う。ここでトークンの意味がなぜ一般的なのか自明のごとく言われるが、説明が必要であろう。

タリスが提唱する対象指示的リアリズム論の核心部分を、以下簡単な要約ないしコメントをつけながら引用してゆく。

In the model I wish to present here, reference to an object is secured by materialising in a sign one (general) sense that the object has. The token (or more precisely the referring expression which may be composed of one or several tokens) acts as proxy for a sense of the object. A given object may have any number of senses.... (p. 107)

タリスのモデルによれば、レファレンス（対象指示性）とは、トークンの一般的な意味(meaning)

と物の一般的な意味 (senses) の1つとの一致なのである。換言すれば、トークンは物の多くの意味の中の1つの代理として働く。

In reference, word and object meet in the identity of the general meaning of a particular token with one of the (general) senses of an intelligible object. Under this analysis, the sign, or the chain of signs constituting a referring expression, acts as an alternative materialisation of one of the general senses of the object, and 'reference' is the coincidence between the signified of the linguistic sign(s) and the sense of the particular object.

This model makes a clear distinction between the signified on the one hand and the referent of a sign on the other – in contrast to post-Saussurean theory where the two are persistently confused. In most cases, we referentially take hold of objects in the world via the general senses that they have. Reference resides in the coincidence between the signified of a particular token or group of tokens and one of the senses of an object. The linguistic signified is not the referent; and, outside of the particular occasions when its parent sign is used to secure reference, it is not even a meaning; it is a value, which is best thought of as a 'virtual meaning' realised only when the word type is materialised in a token *in use on a particular occasion*. (pp. 107 - 08)

シニフィエ
記号は物の一般的な意味の1つを物質化(音声化)する。レファレンスは言語記号のシニフィエ(記号内容)と物の意味の一致である。言語モデルをこのように設定すれば、ポスト・ソシュール派が陥ったシニフィエとレファレント(指示されるもの)の混同を避けることができる。シニフィエは、全体としての記号が発話行為で用いられてレファレンスを生むまでは意味ではなく、差異的な価値にとどまる。タイプ(型)が発話行為で用いられて物質化されトークンとなっはじめて、シニフィエは意味となる、という。ここにもラングでは意味は生じないとするタリスの先入見が覗いている。

... whether or not the linguistic materialisation of one of the senses secures reference to it will depend upon the context in which the referring expression is used. The context will include what has just been said, what can be assumed in the shared world of the communicants, and the actual physical surroundings of the utterance. Because an object has an indefinite number of possible senses (corresponding to the different relations speakers may have to it, the different ways they may see it, the different uses they may have for it, and so on), then there is room for repeated classification and reclassification. (p. 107)

Correlation between a particular token and a particular object is possible only when the textual and physical co-ordinates of the utterance have been mobilised to secure reference. (p. 108)

The sense of a piece of matter will, as we have already remarked, be highly variable, even when its physical properties remain macroscopically constant. It will depend upon the interests, moods, physiological states and personal history of the individual taking notice of it, as well as, more remotely, upon the history of the society in which he lives. (p. 110)

発話行為の時間と空間の物理的指示座標であるコンテクストが動員されなければレファレンスは生まれない。コンテクストには、会話の文脈(すでに言われたこと)、話し手双方に共有される世界、発話を取り巻く物理的環境などが含まれる。ある物は、話し手のその物との関係、話し手のその見方や使い方が多様であることから、無数の意味をもつことになる。それゆえに物の意味は変動的であり、その決定は、話し手個人の関心、気分、生理状態や生い立ち、ひいてはその社会の歴史に依存しているのである。

ここでタリスのレファレンス論をもう一度把握すれば、

Reference, which is the coincidence of one

sense of the object with the signified of a linguistic sign brought down from generality of meaning by tokenisation and the mobilisation of deictic co-ordinates, connects, as we always thought it did, the linguistic and the extra-linguistic realms. The sharp edges of the emergent separate senses are due to the mutual pressure of rival signifieds, as described by Saussure. The sense itself, however, is not intra-linguistic: it still remains tethered to the object as *a sense of that object* and that object comes armed with its own, spatio-temporal rather than semantic, edges, which language cannot supersede or obliterate. The theory shows, moreover, how the division of meaning is not the same as the generation of meaning. To reiterate what we have said in Sections 3.2 and 3.3: it is values, not meanings, that are purely differential and negative; and it is values, not senses, that are pure form without content. (p. 112)

言語と現実を結ぶレファレンスは、物の意味と言葉の意味の一致として、コンテキストが動員される中で、タイプが物質化されてトークンとなることによって、意味の一般性からもたらされる。物の意味は、その物の1つの意味としてその物につながれたままである。物はそれ自体で時間的空間的輪郭をもっており、それは言語が取って代わることも消し去ることもできない。ソシュール派やポスト・ソシュール派は分割することによって意味が生成すると言うが、分割や差異化によって得られるのは内容がなく形式のみの価値であって、意味ではない。

タリスのレファレンス論の中でも、独自の工夫と創造がみられるがゆえに、とりわけ理解が困難なのは、「物の意味」(the senses of an object)の概念であろう。それゆえタリス自身詳しく解説しているので、次にそれを見てゆくことにする。その前にタリス理論の基本的見解を彼の「現実と意味」の捉え方において確認しておくことが、「物の意味を理解する上で役立つであろう。

... it would be even more foolish to suggest that language has the sole authority

to legislate over the division and articulation of reality. If the world of words really did produce the world of things and if differentiated meanings did not pre-exist language, it would be difficult to see what possible function could be served by a language that discriminated meanings. Surely it is because there is an inescapable differentiation of meaning in the universe – food signifying differently from rocks and both having a different significance from fire or predators – that we have language. . . . If there were no differentiated significances prior to the emergence of language and other modes of signification, if reality were undivided before linguistic segmentation, there would be no purpose in communication. Not only would language be redundant, it would of itself be unable to produce meaning: for how should the production of signs bring (differentiated) meaning into a homogeneous universe? (p. 60)

「言語以前に世界には差異化された意味がある」から言語が言語として機能できる。意味は言語のみが決定するのではない。言語による分節化以前に、客観的現実そのものが分割され差異化された意味を有する。物をもつ多様な意味の中から1つを、具体的な発話のコンテキストの中で選び、言葉の意味と結ぶことがレファレンスである。この点で、「言語がそれ自身で意味を生み出すことはないとしても、我々をとり巻く世界を安定させる」と言えるのである。以上のタリスの所説は、「客観的世界がそれ自体で分節化された意味を有する」という特殊な立場にたっている。

それではタリスの「物の意味」論に入る。

The senses of an object – which are potential lines along which it may be classified and narrow the range of expressions that may be used to grasp hold of it linguistically – are determined to a great extent extra-linguistically. But they are not fixed solely by physical properties or by some other 'natural' classifying feature. The sense of an object is potentially as variable as its significance; it is certainly relative to the

situation of the individual observing or talking about it. The sense of the object will have historical and social as well as physical determinants. (p. 108)

物の意味は概ね、言語外の要因によって決定されるが、さりとて物の特性と同じではない。観察者の状況にも左右されるので一定不変ではない。物の意味は、物質的にだけでなく歴史的、社会的にも決定される。その物の多数の意味群の中からどの意味が選ばれるかは、話し手の当面する要求やそれまでの生い立ちにも影響をうける。例えば、丸太(log)が腰掛(seat)になることがある。この限りでは当事者の要求による使用方法で、物の意味が決まるともいえる。しかしそれが全てではない。ある風船が他の風船と取り替え可能でも、煉瓦と取り替えることはできない。物の特性から離れて使用方法だけで物の意味を決定することはできないからである。以上から物の意味を決定するには、言語の外に制限(=物の特性と話し手の要求を含めてのコンテキスト)があることが分かる。(p. 109)

The senses of the object are external to the psyche of the language user in two respects: firstly, they are tethered to a particular object rather than being abstracted as a result of repeated encounters with supposedly similar objects; and secondly, they owe their independence, their separate and distinct existence, such as it is, to the position they have come to adopt in the language system. It is language, not the psyche of the individual, that confers the edges upon the senses. For this reason, the theory I have put forward is in no way a return to psychologism. The 'sense' retains its attachment both to the public object and to the public language: it is not a private entity. (pp. 109 - 10)

物の意味は次の2点で個人の心理の外にあるものである。(1)抽象化されたものではなく、ある特定の物につながれている。(2)言語体系の中に位置を占めることによって存在の独立性を獲得してい

る。物の意味に輪郭を与えるのは個人的心理ではなく言語である。以上から、物の意味は私的実在ではなく、公的な物と公的な言語に附いている、といえる。

Let us conduct the thought experiment of considering an object being encountered alinguistically. It has a significance which we may characterise as a nimbus around it. This nimbus of unstable or nascent meaning becomes differentiated into stable, denumerable, discrete, hard-edged senses only when they are picked out linguistically. The word freezes one sense of the object from a shifting cloud of significance. Until the relevant terms pick them out, the senses are really 'sense ions' whose distinct or separate existence is only notional.

It must not be thought that language creates or generates either the senses of the object or the object itself. Rather, it confers an *aseity* upon senses that, prior to their secondary materialisation in the signifier of the sign, are confused with other senses. Language does not create differentiated meaning; rather it stabilises senses that are pre-linguistically fused in the significance of an intelligible object. (p. 112)

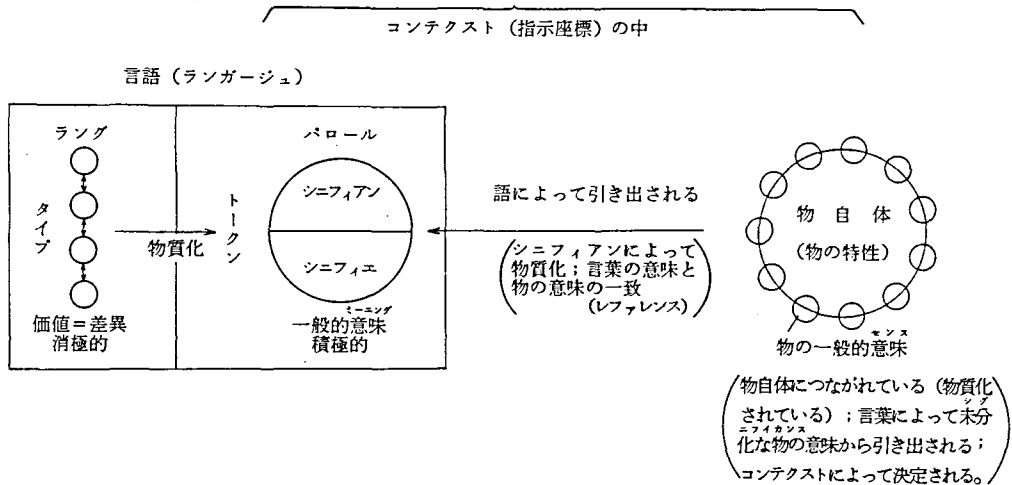
物は回りに雲状の「未分化な意味」をもつ。それは不安定な発生期の意味であり、物の意味として言語によって引き出されて初めて安定した明確な輪郭をもつに至る。言葉によって引き出される以前の物の意味は、厳密には「意味イオン」というべきものである。したがって、言語が差異化した意味を生み出すのではなく、了解可能な物の「未分化な意味」の中に融けこんでいる「物の意味」を言語が安定させるのである。

以上が、言語と物の一対一の照応を説く同型主義を避け、かつポスト・ソシュール派が否定した言語と外的現実との関係を回復しようとして提唱されたタリスの言語モデルであり、彼の対象指示的リアリズム論の基礎を構成するものである。

〈タリス理論の批判的検討〉

錯綜し難解と見えるタリス理論の理解を容易に

するために、はじめにタリスの言語モデルを図示
してみる。



〈図：タリスの言語モデルについての私案〉

以下に、問題点をできるだけ整理して検討してみたい。

(1)意味の二元論：言葉の意味と物の意味について
意味とは言語学の一般的定義によれば、「あること(もの)についての言葉の意味」である。言葉の外の事物や概念に言葉がラベルを貼るという言語命名説を否定し、概念(意味)は言葉が含む込むとした点に、ソシュールの言語に対する洞察²³があったことは周知である。しかるにタリスは言葉の意味とは別に物の意味という概念を提出し、両者の一致を対象指示性^{レファレンス}とした。ここにタリス理論の最大の特徴と工夫がある。しかし惜しむらくは、私の見るところ、タリスが言語研究にもたらしたのは前進ではなく後退であったようである。以下指摘する。

(a)「物の意味」というタリス説の基礎には、現実世界自体が言語に先立って、分節化された意味をもつと彼が見ていることがある。そうでなければ、言語が言語として機能しえないという。この見方は、「差異化によって言語が現実を生み出す」というポスト・ソシュール派の反リアリズムを回避しようとして提出されたものであり、またそれ

は、物を自然記号と捉え、客観世界は外的に開かれた意味連鎖をもつというタリス説の基礎をなしている。その問題点にはすでに触れたが、もう一度考えてみたい。

リアリズム論の基本的立場の1つに、ものごとを全面的な連関のなかで捉える、というのがある。すなわち、世界のすべての事物、過程、現象は、限りなく多種多様であるが、それらは個々ばらばらなものではなく、相互に結びつきあい、互いに転化し、互いに条件づけあい、相互作用しながら全面的につながっている、と見るのである。タリスの客観的世界に分節化された意味と相互の意味作用があるという説は、世界の全面的連関というリアリズムの命題を誤解したものと思われる。しかしそれが帰結するところは、等閑視できない。リアリズムの基本的見地は、ありのままの客観世界を認め、それを主観が能動的、実践的に認識することを提起する。しかしタリスの「物の意味」論は、客観世界を主観(観念)化することになり、リアリズムによる認識論の深化がはかれなくなる。タリス理論の誤謬の核心はここにある、と私は見る。

(b)「物の意味」は、「物自体につながれている」という点で物質的であり、未分化な物の意味から言葉によって引き出されるという点で、(言語は意識の一形態に他ならないから)主観的である。すなわちタリスの物の意味は、客観的かつ主観的という二重の側面をもっている。これが、言葉と物自体が直接に結びつくという同型主義を避けるために考案されたタリスのモデルである。言葉の意味と科学的概念は同じではないとするのが、言語学の常識であるから、タリスの同型主義批判はその限りでは正しい。しかし、世界は物質的なものと観念的なもののどちらかに区分されるのであるから、二重性をもつタリスの「物の意味」は結局、折衷主義を免れない。その古典的形態はカントの認識論にみることができる。それは、物自体は認識できないが、空間と時間という主観的形式によって構成される限りにおいて客観を現象として捉えることができるとする。タリス理論の全体的性格は、このような主観と客観の折衷というカント主義であり、この点で、F. ジェイムソンの「政治的無意識」論が到達した地平に酷似している。²⁴⁾

物には、自然科学が対象とする本質そのものではないが、社会生活上の関心から捉えられる諸相があり、どの相を言語化するかは、その言語共同体の社会的歴史的背景(コンテキスト)の中で慣習として定まり、言語体系の中に定着している。このような言語と物の関係を追究するのが本来のレファレンス論であろう。ところがタリスは、物の諸相を物の意味と誤解した。タリスの「物の意味」とは、もともと物についての言葉の意味であって、それはタリスのトークン(生起例)の意味と同じものである。同一のものを、頭の中で2つに分け、一致するというのが、タリスのレファレンス論である。それは抽象的、観念的な操作にすぎず、結局は何も説明したことにはならない。

(2)パロール主義あるいは経験主義について

タリスは、ソシュールを誤読して、ラングはすべて差異的で消極的であり、パロール次元においてはじめて言語の積極的な側面が現れる、という先入見に立っている。それがタリスのポスト構造主義批判のみならず、タリス自身の言語理論にも暗い影を投げかけている。

(a)「特定のトークンの一般的な意味」と「特定の物の一般的な意味」が一致するという。しかしタリスが言う2つの意味がなぜ一般的なのか、説明されていない。おそらくタリスは、意味とはすべて一般的と考えているのである。しかしそれは言語の実相に相入れない。1例をあげよう。

(発話において) Look at the black dog over there ! / Look at the white dog over there!
この文例で、タリスなら、dogは共通に用いられるから一般的であり、特定の指示作用は、定冠詞+形容詞にあると、取るのであろう。しかし具体的なコンテキストで用いられる発話文では、定冠詞の有無にかかわらず指示的である。

I saw a dog in the park yesterday.
この文例でのdogは不定冠詞がついてはいるが、特定の犬を指している。²⁵⁾

「特定のトークンの一般的な意味」という矛盾した定義に陥った原因は、タリスがラングとパロールの本性について無理解であったことによる。ラングの中の語に、あるクラスを指示する一般的表象としての意味を認め、それを用いて、パロール次元での語が、特定の状況のもとで特定のものを指示する特定の意味をもつ、とすべきだったのである。²⁶⁾

(b)コンテキストが動員されて、タイプがトークンとなり、物の意味が決定されるという。タリスが言うコンテキストには多種多様なものが含まれる。拾い上げて便宜的に区分してみる。

- ①話し手個人の関心、気分、生理状態、生い立ち、要求とそれに基づく物の使用方法；話し手双方に共有される世界；会話ですでに言われたこと；発話のときの物理的環境
- ②共同社会とその歴史

タリスでは、仮に私が分類した発話を囲む狭義のコンテキスト①と社会的歴史的な広義のコンテキスト②の区別が明確ではない。たとえタリス理論に従うとしても、社会的歴史的コンテキストの中で、物の複数の意味が決定されるということと、具体的な発話の状況(コンテキスト)の中で、すでに定着しているその物の複数の意味から1つを選び、トークンと結びつける、ということは異なる次元に属すると考えざるをえない。それが混同されるのは、ラングを差異のみと見、積極的な意味が生じるのはすべてパロールにおいてと取るタ

リスの先入見に拠るものである。

多種多様なコンテキストが動員されて決まるタリスのある物の「物の意味」は、一定不変ではなく無数にあることになる。コンテキストは無限にあるから、従って物の意味も無限に拡散し、意味は定まることがない。これは、タリスの意図とは別に、際限のない記号のネットワークの中で、意味は非在と現前を繰り返し、決定不能に陥るというデリダの痕跡理論に通底することになるのではないか。

他にもタリス理論の問題点は幾つかあるが、検討すべき主要な側面には、これでふれたことになろう。

おわりに

タリスの『ソシュールにあらざる』は、ポスト・ソシュール派の反リアリズムの潮流に抗い、リアリズムの復権をはかろうとする著者の良心的で真摯な意図に徹頭徹尾、貫かれており、その点では高い評価が与えられてよい。しかしこれまでみてきたところ、著者の意図にもかかわらず、本書は重大な誤謬をはらんでいることを指摘せざるをえなかった。その個々については、本論の中で私見を述べたので繰り返すことはしない。が、まとめてタリス理論の全体的性格を端的に言えば、言語と現実の直接的照応を説く同型主義アイソモルフィズムと言語外の現実を否定するポスト構造主義、これら2つの誤った傾向を避けえるリアリズム論を構築しようとして、結局折衷主義に陥ってしまったということである。それは俗流マルクス主義とポスト構造主義双方を批判して、超越不可能な地平を切り開こうとしたF. ジェイムソンの場合によく似ている。この点で二人はともにイカロスの翼である。タリス理論には、パロール主義ともいえる経験主義が、その積極面をもちながらも、暗い影を落としている。そのために、言語と現実を結ぶ対象指示性レファレンスは、発話のコンテキストの中でしか決まらないという場当り的なものになっている。これは、現象の中に、現象を貫く本質的なものを発展的に捉えようとする真のリアリズムの精神からはかけ離れた皮相な俗流リアリズム論を招来することになろう。

ポスト・ソシュール派の反リアリズムに対する批判の要諦は、それが「ソシュールにあらざる」こ

とを衝き、さらにはレファレンス論を積極的に提起すべきだとするタリスの考えに、私も同意する。ただその批判的作業の方法が、タリスと管見ではいささか異っている。私も以前、言語のレファレンス対象指示性について言及したことがあるので、タリスへのオルターナティブとして拙稿から結論部分を引用して本論を閉じることにしたい。

最後になぜソシュール言語学を利用して記号の反映性を否定する理論が繰り返し現れるかを考えてみたい。ソシュールの理論は言語学としては卓越したものといえよう。しかしその幾つかの欠点のうちの1つは、言語を効果的に研究するためにと記号の指示対象を一時そして結局最後まで棚上げにしたことである。そこが後世の構造主義者やポスト構造主義者につけこまれ、彼らにソシュール言語学の恣意的利用を許してきたのである。それゆえわれわれは記号と指示対象の関係を、すなわち言語の反映性の問題を明らかにしてゆく必要がある。これについて尾関周二氏の『言語と人間』に従って簡単にまとめておこう。尾関氏は言語の意味をヘーゲルにならって一般的表象と考える。一般的表象とは特定の事物についての具体的イメージである心像と高度に抽象化された概念の中間的性格を有する。例えば個々の犬についての心像を社会的に抽象化、概念化した犬というものの、犬のクラスが「イヌ」の表象である。言語意味をこのように考えれば、それは現実対象と発生的に連続している心像を一般化、抽象化していることになり、その反映性は本源的なものである。しかし言語記号は単純に1つのクラスを指示しているのではなく、その相補的なクラスを同時に指示している。例えば記号「イヌ」は犬のクラスを指示しながら必然的に犬でないもののクラスを否定的な仕方を含んでいる。他方「イヌ」という記号自身の方でもその相補的なクラスに構造化され、この2つの全体集合のあいだの関係が指示性、反映性としてある。ソシュールの差異の理論もこの構造的なクラスに言及していたのであるが、惜しむらくは現実対象を考察の域外に置いてしまっている……

言語とは本来「実践的意識」である。言語は意識の発生とともに生まれ、人々が共に外界に働きかけつくりかえ、共同社会を成立せしめる必要性に応えてきたし、そのことは今も変わらない。文学に携る者は言語を離れることができないがゆえにまっとうな

言語観に立脚する必要がある。そのことが現実社会を豊かに形象化した文学的創造の営みを可能とするであろう。

(1989. 8. 4 受理)

注

1. Raymond Tallis, *Not Saussure: A Critique of Post-Saussurean Literary Theory* (Macmillan, 1988). なお本書からの引用はすべて文中の括弧内に頁数のみを記す。
2. Ryoichi Funayama, "After the Play ; A study on deconstruction with reference to Jacques Derrida's theory of écriture" 『長野大学紀要』 vol. 32, 1987年5月. pp. 109 - 22.
3. 船山良一, 「研究ノート、ディオコンストラクションについて」 『季刊新英米文学研究』 vol. 18-1, 1987年2月. pp. 46 - 9 と p. 59.
4. F ソシュール, 『一般言語学講義』小林英夫訳 (岩波書店, 1972) または, *Course in General Linguistics* trans., Wade Baskin (London: Fontana, Modern Masters, 1983) を用いる。本書からの引用はすべて、前者は『講義』、後者は *course* と省略し、文中の括弧内に頁数のみを記す。
5. 船山, 「ディオコンストラクションについて」 pp. 48-9.
6. 尾関周二, 『言語と人間』 (大月書店, 1984年) p. 136.
7. Funayama, 'After the Play', pp. 118 - 19.
8. 船山, 「ディオコンストラクションについて」 pp. 48-9.
9. Funayama, 'After the Play', p. 119.
10. 「価値」と「意義(味)」の関係についての管見は、拙稿 'After the Play', pp. 117 - 19 で述べておいた。なおそれは基本的には、丸山圭三郎『ソシュールの思想』 (岩波書店, 1981) pp. 314 - 46 に依拠している。
11. 丸山圭三郎, *op cit.*, pp. 330 - 31.
12. *Ibid.*, p. 335.
13. *Ibid.*, p. 344.
14. *Ibid.*, pp. 341 - 42.
15. *Ibid.*, p. 345.
16. 堀尾輝久, 『教育入門』 (岩波新書, 1989) pp. 18-9.
17. Terry Eagleton, *Criticism and Ideology* (London: New Left Books, 1976) p. 32.
18. 船山, 「ディオコンストラクションについて」 p. 32.
19. *Ibid.*, p. 48.
20. 記号の恣意性についてタリスは本書でこう書いている。
The fundamental post-Saussurean confusion is between the signified of a sign and the referent of an utterance or a piece of text. Eagleton, for example, tells us that Saussure argued that the relationship 'between sign and referent' was an arbitrary one; but Saussure's central argument was, of course, about the arbitrariness of the relationship between signifier and signified and the nature of these two notional entities and not about the relation between the sign as a whole in use and its referent. (p. 94)
T. イーグルトンをポスト・ソシュール派に含めることは幾つかの留保条件をつけた上でなければできない、と私は思う。さらに直接的には、ここで引用されているイーグルトンは、構造主義批評を批判的に解説しているところなので、タリスの明白な誤読であることを指摘しておく。(Eagleton, *Literary Theory* Blackwell, 1983, pp. 107 - 08, 参照)
そのことはさておくとして、ソシュール言語学における記号の恣意性とは、本来、シニフィエとシニフィアンとの関係について言われたものを、記号と指示対象の関係についてと曲解することからポスト・ソシュール派の言語外現実の否定が生じる、とタリスは言う。私見のかぎり、ソシュール言語学に基本的な言語による「切り取り」の概念を取り戻せば、「恣意性」は上のどちらの意味で取っても大差なく、さりとてその理論から言語外現実の否定を導くこともできない、と私は考える。Cf. 拙稿, 「ディオコンストラクションについて」 pp. 48 - 9.
21. デリダの痕跡理論については、拙稿 'After the Play' pp. 109 - 21、を参照していただきたい。
22. 船山良一「ユートピアン、F. ジェイムソン；『政治的無意識』について」 『世界文学会』 vol. 68, 1988年9月, pp. 53 - 65.
23. 丸山圭三郎, pp. 124.
24. 船山, 「ユートピアン、F. ジェイムソン」 p. 64.

25. 安井 稔、『英文法総覧』（開拓社、1982） p. 62.
26. 尾関周二、 p. 136.
27. 船山、「ディコンストラクションについて」 p. 49
と p. 59.

（付記）本稿は、早稲田大学言語教育研究所によって開催されている「言語文学理論研究会」の活動の一環として取り組まれたものである。